

斎宮セミナー 『神話と伝承』

令和4年9月10日、ホテルビナリオ嵯峨嵐山で神道国際学会が共催する第23回斎宮セミナー『神話と伝承2』（主催：斎宮行事保存会）が開催され、滋賀大学の真鍋晶子教授が『ケルト神話の魅力』と題して、カザフスタン出身の早稲田大学高等研究所のアンダソヴァ・マラル講師が『日本神話と中央アジアの口承文化』と題して、アイルランド出身のピーター・マクミラン杏林大学客員教授が『日本古典の不思議』と題して、それぞれの研究成果を発表した。

「斎宮セミナー」は平成11年に、嵯峨野宮神社の懸野直樹宮司が復活させた「斎宮行列」を学術的な面からサポートするものである。「斎宮（斎王）」とは、天皇の代替わりごとに、伊勢の神宮に天照大神の御杖代として遣わされた斎王（未婚の内親王もしくは女王）のことで、飛鳥時代から南北朝時代まで六百年以上続き、平安時代には御所から方違えも兼



真鍋晶子教授の講演に耳を傾けるセミナー参加者

ねて、嵯峨嵐山の大堰川（桂川）で禊ぎを行った後、伊勢路へと向かったと伝えられている。

ケルト神話の魅力

開会に当たって、共催団体を代表して神道国際学会の三宅善信理事長が挨拶を行った。続いて、滋賀大学の真鍋晶子教授が『ケルト神話の魅力』と題して研究発表を行った。真鍋教授は、ユーラシア大陸の東端沖に浮かぶ日本列島同様、西端沖に浮かぶアイルランド島は、文明の中心地から離れている関係で、現在でも古い文化や習俗が数多く残されているという共通点があり、首都ダブリンには国立妖精博物館まである。

アイルランドにおける諸伝承は「物語」という形式で現在に伝えられており、成立年代別に「神話物語群」、「アルスター物語群」、「フィン物語群」、「歴史物語群」に大別される。キリスト教伝来以前に成立していたドルイド教の神話には、「天地開闢」の話はなく、大洪水の後、6つの神々の部族が次々とアイルランド島でやってきて支配者となるが、最



真鍋晶子教授

後はゲール人の祖先である人間の部族ミレー族に敗北し、神々や巨人は妖精へと姿を変える。これなどは、天孫族に敗れて葦原の中津国を追われた出雲神話や、朝廷の権威に服さない先住民たちが「土蜘蛛」と表現された話と類似性がある。

次が、英雄クー・フリンが活躍する「アルスター物語群」である。太陽神ルーと人間の女性の間に生まれたクー・フリンと彼が戦いを繰り返す女王や女神たちは、FGOなどのロールプレイングゲームのキャラクターに数多く採用されている。続いて、英雄フィン・マッククルと彼の率いるフィアナ騎士団の活躍する「フィン物語群」は、神族・人間・妖精などの登場キャラクターも多く、英国の『アーサー王物語』のベースになったと言われている。最後の「歴史物語群」は、アイルランドに実在した君主たちの伝承が神話と融合させられた形で語られている。と、真鍋教授はアイルランドの文芸史について概説した。

日本神話と中央アジアの口承文化

続いて、カザフスタン出身のアンダソヴァ・マラル早稲田大学高等研究所講師が『日本神話と中央アジアの口承文化』と題して研究発表を行った。シベリアのトルコ系民族であるヤクート（サハ）族は、精霊（神）はリズムミカルで能弁な言葉を好むので、自らを選ぶ者（シャーマン）には雄弁の才能を与える。能弁であることは神に選ばれた証である。マラル講師は、『マナス』など中央アジアの



A・マラル講師

叙事詩は、節の繰り返しが多いなどのリズムミカル性、語り手はシャーマニックな存在、多義性・多層性・多声性、比喩・間接表現など、『古事記』とは多くの共通点がある。

『古事記』は天武天皇が諸々の家に伝わっていた「帝紀」と「旧辞」を集めた際、多くの齟齬があったので、稗田阿礼に「誦み習はせて、それを太安万侶が書き記した。稗田姓は宮廷儀礼である鎮魂祭において歌舞をするアメノウズメの子孫の猿女君に属する巫女。

古事記と中央アジアの英雄叙事詩には内容的にも多くの共通点がある。例えば、兄弟たちに虐められたオホナムチは、スサノヲのいる冥界「根之堅州国」へ行ってそこでさまざまな試練を克服して、スサノヲの娘スセリビメと結婚して、この世に帰還後、兄弟たちを追い払って偉大な王「オオクニヌシ」となったが、中央アジアの英雄叙事詩である『エル・トラスティック』、『エル・タルグン』、『アルパスム』などでも、主人公が兄弟に虐められて、この世を追放されて冥界に行き、そこで怪物を退治して異界王の娘と結婚し、この世に帰還後に王となるという「成長物語」のストーリー展開である。

日本古典の不思議

三人目は、ピーター・マクミラン杏林大学客員教授が『日本古典の不



P・マクミラン教授

▼8面に続く

第25回国際神道セミナー 『神々と伝染病2』報告

令和3年3月9日、東京駅に隣接するサピアタワー内の関西大学東京センターにおいて、特定非営利活動法人神道国際学会の令和3年度社員総会と第25回国際神道セミナー『神々と伝染病2』が開催された。首都圏で新型コロナウイルス感染症の緊急事態宣言の延長がなされた中、社員総会には大半が委任状提出による参加方式で開催された。また、セミナーも前年秋、京都で開催された第24回国際神道セミナー『神々と伝染病1』と同様、内外にオンラインで生配信され、会場に参加した人々にはソーシャルディスタンスを確保するため、十分な座席間隔を取って開催された。



三宅善信理事長の趣旨説明に耳を傾けるセミナー参加者

令和3年度社員総会
3月9日午後1時、定款に則り三宅善信理事長が、特定非営利活動法人神道国際学会の令和3年度社員総会の開会を宣言した。新型コロナウイルス感染症の世界的パンデミックに伴う欧州各国からの入国規

制を目前に控え、マイケル・パイ会長の来日が適わなかったことを三宅理事長が説明し、その上で、宇根希英事務局長から「招集時点での社員数323名中、170名（委任状含む）の出席により社員総会成立」の確認がなされた。続いて、出席役員の紹介と議長選出が行われ、塩谷崇之常任理事が議長に選出された。執行部を代表して理事長が一言挨拶を行った後、塩谷議長の下、第1号議案として、令和2年度事業報告ならびに決算報告および監査報告が行われ、承認された。続いて、第2号議案として、令和4年度事業計画ならびに予算案について理事長から提案され、承認された。また、第3号議案として、議事録署名人の選定が行われ、出席社員より山本孝司座間

神社宮司（神奈川県）と理事のアレクサンダー・ベネット関西大学教授が指名、承認され、社員総会は無事閉会した。

この部分の内容は以下からご視聴ください
https://youtube.com/IBEXem_UPE

昨秋に引き続き『神々と伝染病』をテーマに

社員総会閉会の後、休憩を挟んで、パンデミックから一年を経て一向に流行の衰える気配の見えない新型コロナウイルス感染症の蔓延を受けて、昨秋京都で開催された第24回国際神道セミナー『神々と伝染病1』の続編として、第25回国際神道セミナー『神々と伝染病2』が開催された。最初に三宅善信理事長が、趣旨説明の意図を込めて主催者挨拶を行った。セミナーは、西村明東京大学大学院准教授と小川有閑大正大学地域構想研究所主幹研究員と鈴木岩弓東北大学総長特命教授の3名がそれぞれの研究発表を行い、弓山達也東京工業大学教授がモデレータを務めた。

『衛生と信仰のはざままで』

——近代日本宗教史に学ぶ——

一人目の発表は、東京大学の西村准教授が『衛生と信仰のはざままで——近代日本宗教史に学ぶ——』と題して、近代的衛生観念・政策と民間信仰とが交差する事例として、明治28年（1895年）に、コレラの防疫活動で殉職した増田敬太郎巡査を祀った佐賀県東松浦郡入野村高串（現、唐津市）の「増田神社」における信仰実践に注目して論を展開した。

19世紀末のコレラ流行期に、赴任地での献身的な防疫活動で殉職した増田巡査の慰霊と顕彰をするために世話になった村人たちが増田神社を建立した。当初、このローカルな神社における疫病除けの信仰はこの集落の人々だけのものではなかった。しかし、増田神社のご利益信仰が県下に拡大するや、文明開化による迷妄打破や近代的な公衆衛生観念の啓蒙を目指す警察上層部や増田巡査の出身地の知識人は、この「民間信仰」に否定的になっていった。

ここで西村准教授の話は、いったん日本の近代化プロセスにおける「民間信仰」の来歴の紹介として、大正期に入ってから、維新以前からあった迷信だけでなく、科学的合理的で、あると信じていた近代西洋から新たにもたらされた交霊術等や「宗教、科学、哲学、道徳を包容し超越する」と説く田中守平の創始した大霊道の隆盛や大本の出口王仁三郎との世界的パンデミックをもたせさせたスペイン風邪への対処法に関する論争など、一概に近代科学文明の勝利とは言えない状況になってきたことを紹介した。

「戦争の時代」となった昭和期に入ると、「増田神社」の信仰は新たな展開を見せる。大東亜への戦線の拡大によって、日本軍の貧弱な医療体制と悪辣な衛生・栄養条件下で治療もままならず外地で多くの傷兵が斃れる中、痢病に感染した入野村出身の一兵士が、持参した増田神社の御札を焼いてその灰を服用したところ、不思議なことに手の施しようのなかった痢病がたちどころに全快し、軍隊内でこの噂が拡大し、増田神社の名声は一挙に拡大した。戦後も、毎年増田巡査の命日である7月26日には夏祭りが斎行され、日本で唯一の「警神」として、警察音楽隊、海上警備艇もパレードに参加している。

西村准教授は、民間信仰について、「伝統的な組織宗教の側からすれば、それぞれの教団・宗派の近代的あり方を模索する中で、長い間、庶民的に篤い信仰を集めてきた民間信仰は、単に教化し、矯正すべき対象としてネガティブな存在であったばかりではなく、新宗教との対抗関係の中でいかにそのエネルギーを自らの内に取り込めるかというポジティブな存在でもあった」と締めくくった。

西村准教授の講演を受けて、昨秋、京都で開催された第24回国際神道セミナー『神々と伝染病1』で講師を務めた大阪大学大学院言語文化研究所の永原順子講師がコメントを述べた。



西村明准教授

この部分の内容は以下からご視聴ください
<https://youtube.com/VEZM5pG4I>

『コロナ禍が寺院にもたらす影響——寺院向けWEB調査の結果から——』



小川有閑研究員

二人目の発表は、大正大学の小川主幹研究員が『コロナ禍が寺院にもたらす影響——寺院向けWEB調査の結果から——』と題して、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが日本社会、なかんずく、伝統仏教の未寺に及ぼした影響について発表した。大正大学は、1925年に天台宗・真言宗豊山派・浄土宗が協力して東京に設立された総合大学である。小川研究員は、従前から築いてきた伝統仏教各寺院とのネットワークを活かし、わが国における新型コロナウイルス感染症の第一波と第三波が猛威を揮っていた最中の2020年5月と同年12月の二回に分けてネットを通じて寺院へアンケートを行った。有効回答数は、第1回調査が517件、第2回調査が304件。応じた寺院は、浄土真宗各派、浄土宗各派、曹洞宗、真言宗各派、日蓮宗、臨済宗各派、黄檗宗、天台宗、時宗、融通念佛宗などほとんどの宗派を網羅しているが、オンラインアンケートとい

う特性上、30代から50代の僧侶が全体の85パーセントを占めており、僧侶の中心年齢層である60代から70代と少しズレがあることが予め指摘された。小川研究員は、東京と全国平均、あるいは、首都圏と関西圏を比較することによって、コロナ禍がもたらした変化について分析した。まず、コロナ禍前と中では、全国平均も東京も約90パーセントが「会葬者数が減少した」という点では大差がなかったが、「一日葬などの簡略化が行われている」という点では、全国平均の約40パーセントに対して東京では約80パーセントと大きく差が開いた。なお、「一日葬などの簡略化が行われている」という点については、関西圏ではわずかに約25パーセントしか変更されてお



講演中の様子

らず、顕著な差が見られた。なお、法事等については、参列者数の減少、法事後の会食の取りやめ、法事そのものの延期など、全国平均と東京との間に有意な差は見られなかった。そこで、小川研究員は首都圏と関西圏の葬儀の簡略化の顕著な差異の原因として、僧侶による檀家への「月参り」の有無を取り上げた。関西圏では、僧侶が毎月檀家を回ってそれぞれの家の仏壇で月命日に当たる先祖の供養をする習慣があるが、コロナ禍で彼岸会やお盆の施餓鬼など檀徒が寺院に集まって行われる法要が「無参拝」や規模を縮小して実施されたにもかかわらず、日々の「月参り」は約3分の2が「従来通り」に実施され、檀家での茶菓接待の辞退や時間短縮まで含めると、約9割の寺院で「月参り」を継続していた点が、首都圏と関西圏の葬儀に対する大きなアプローチの違いを生み出していると分析した。

この部分の内容は以下から視聴ください
<https://youtube.com/yvfr-nogtu>

小川主幹研究員の講演を受けて、麗澤大学国際学部の岩澤知子教授がコメントを述べた。

『流行病と宗教民俗』



鈴木岩弓教授

三人目の発表は、東北大学の鈴木岩弓総長特命教授が『流行病と宗教民俗』と題して、流行病に関わるカミには、流行病を起すカミ(疫病神・病魔)がどこか(ヨソ)からやって来るので、流行病を阻止する鍾馗・須佐之男・神農・為朝などの人神は、これらをウチに入れずにヨソへ追い出す機能を持つことを紹介した。

最初に、鈴木教授は、宗教民俗学の立ち位置は「教団側の説く教理ではなく、信者の信じ方にある」と規定して、信仰や宗教を「人間とカミ(超自然的存在)との交渉」と理解している。不可視な「信念」の部分を推し量るために、目に見える「行為」の部分に注目している。「信仰」と「宗教」の違いは「組織性の濃淡」にあると規定した。続いて、「流行病」を病理学的な概念である「伝染病」や「感染症」としてではなく、民衆から文化的疾病である「えやみ(疫疾)」や「ときのけ(時の氣)」として認識される「はやりやまい(流行病)」の現象として問題にした。それ故、病は「勞き」であり、その原因は「病鬼」や「病魔」によるものと考えられていた。現代社会においても、人が病気に罹った際には、セルフ・ケアなどの民間領域と病院などの専門領域と信仰治療などの民俗領域とさまざまな対処法があるとした。

また、入信動機としての「貧・病・争」などの「苦」からの脱却だけでなく、「心なおし」として精神的満足への希求。流行病への入信経緯としての病治しの例として、1977年に土中から掘り出された広島県府中市の「首無地蔵」信仰を紹介。他にも、仙台市の「セキシヤビキ(百日咳の神様)」や「オホウソウ(疱瘡の神様)」を紹介した。

この部分の内容は以下から視聴ください
<https://youtube.com/uq1q3vnevk>

流行病の特質として、流行して多くの人が罹る。症状が重くなり、死亡することも多い。治療しても後遺症や痕が残る。通過儀礼的病気(天然痘・麻疹・水痘)の場合もある。病因は不可視の存在である疫病神・病魔・怨霊などのカミ(超自然的存在)がウチに入ってくる。だから、これを追い払わなければならない。個々の家の入口の護符や村境の藁作りの人形道祖神(カシ



弓山達也教授の進行で盛り上がったパネルディスカッション

第9回フィールドワーク 疫神の原点を播磨路で探る 廣峯神社

令和4年10月12日、姫路城の北方広峯山に鎮座する廣峯神社で神道国際学会主催の第9回フィールドワークが実施された。「千年の都」として栄えた平安京の人々にとって、疫病の流行は戦乱と共に、尊卑を問わず人々のいのちを脅かす最大の関心事であり、疫病対策として祇園祭が現在に至るまで斎行されてきたが、疫病除けの信仰を集めた八坂神社や岡崎神社の祭神は、播磨國廣峯神社から勧請されたと伝えられている。

幾重もの疫病防波堤

神道国際学会では、平成9年に京都祇園の八坂神社で開催された国際神道セミナーにおいて、当時同神社の宮司をされていた故真弓常忠先生が「八坂神社の祭神は、明治維新以後は素戔嗚尊と配偶神の櫛稲田姫と八柱の御子神いうことになっているが、実は道教系の疫神牛頭天王とその妃神頗梨采女とその八王子であり、陰陽師の安倍晴明が著したとされる『篋篋内伝』に収録されている



フィールドワークで廣峯神社を訪れた神道国際学会一行

たか」という著作を刊行したが、その中でも、牛頭天王信仰については縷々触れられている。島国である日本には、古来、新しい伝染病は常にシナ大陸もしくは朝鮮半島から渡来した。それ故、王城の地である畿内に如何に疫病を侵入させないかは、為政者にとっても大きな課題であり、筑前国の太宰府や備後国鞆の浦

蘇民将来と巨匠将来のエピソードに由来する」と講演され、早くから伝染病と神祇信仰の関係に注目していた。さらに、「日本書紀に登場する素戔嗚尊は新羅系の神である」と述べ、古代朝鮮半島との関係が神道の成立に大きく関わっていることを明らかにされた。

本会の三宅善信理事長は、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが始まる1年以上も前に『風邪見鶏…人類はいかに伝染病と向き合ってきたか』という著作を刊行したが、その中でも、牛頭天王信仰については縷々触れられている。島国である日本には、古来、新しい伝染病は常にシナ大陸もしくは朝鮮半島から渡来した。それ故、王城の地である畿内に如何に疫病を侵入させないかは、為政者にとっても大きな課題であり、筑前国の太宰府や備後国鞆の浦

の迎賓施設で、外国使節に「饗応」をいう名の「隔離検疫」（経験則から、感染症は一定の潜伏期間を経た後に発症することが判っていたので、渡来人を一定期間隔離しておけば、もしその人物が疫病を持っていた場合にはその間に発症する）を繰り返し、畿内へ入る直前の播磨國の廣峯神社に「強力な疫神」牛頭天王を祀る（鞆の浦にも牛頭天王を祀る沼名前神社がある）ことによって、大和朝廷が幾重もの防波堤を築いていたことが記されている。

牛頭天王の総本社

10月12日、御師の館跡が残る丁石の並ぶ東坂（表参道）を歩いて廣峯神社に到着した神道国際学会の一行を幸田精久宮司以下の神職が迎え入れてくださり、廣峯神社の御師の子孫でもある姫路の郷土史家芳賀一也氏もフィールドワークに加わった。廣峯神社の社伝によると、天平5年（733年）に吉備真備が大唐から帰朝する途

上、この地で神威を感じたことを聖武天皇に報告し、翌年白幣山に創建された（現在でも、「奥宮」として磐座と吉備社と荒神社が鎮座している）。その後、天禄3年（972年）に現在地の広峰山頂に遷座したとされる。『延喜式神名帳』には記載がないが、『日本三代実録』の貞観8年（866年）に「播磨國無位素戔嗚神に従五位下を授く」とあり、当社のことと推察されるが、遣唐使であった吉備真備が創建に関わったことか



廣峯神社を正式参拝する神道国際学会一行

が、陸奥の大地震と大津波で多数の犠牲者が出た貞観11年（869年）に平安京で祇園御霊会が大々的に厳修されたが、その年に、当社から祇園観應寺感神院（現在の八坂神社）に牛頭天王を分祠したという説があり、播磨國から遷座される際に休息したと伝えられる神戸市の祇園神社、大阪市の難波八坂神社、京都市の岡崎神社にその伝承が残っている。

中世には多くの神社がそうであったように、神官が御家人や地頭を兼任して軍事組織も兼ね、御師たちは摂津国から伯耆国に至る広い地域で廣峯信仰を流布した。姫路城を拠点にした羽柴秀吉の軍師として活躍した黒田官兵衛は、この御師たちのネットワークを利用して情報を集めたと言われている。神仏習合が進んだ江戸時代は、寛永寺の配下に組み込まれ、社家が諸大夫の官位官職に就き、禁裏勅願所も務めた。また、播州地域の人々



廣峯神社本殿背後の九星参りの穴と本殿後方の摂社・末社群

が伊勢参りをする際には、出発時と帰参時には廣峯神社に参拝する習わしがあった。

廣峯神社に託された重層的信仰

廣峯神社の創建に努めた吉備真備は、唐から日本へ陰陽道を伝えた人物でもあり、本殿の背後の壁には九つの穴が空いており、九星の運命星を守護する神々が鎮座しているとされ、願い事を書いた祈願札をその穴に入れ、願い事を三度囁くと願いが叶うと信じられてきた。さらに、本殿の後方には、一間四面の小さな天神社・稲荷社・山王権現社・庚申社・大鬼社・冠者殿社・熊野権現社の7つの摂社・末社（いずれも姫路市指定重要文化財）と二間四面の薬師堂がバラバラの向きで鎮座しており、長い歴史を通して廣峯神社に仮託された多くの重層的な信仰を見ることができ、有意義なフィールドワークであった。

インドネシアでG20宗教サミット

令和4年11月2日から6日まで、インドネシアが議長国を務めるG20サミットの公式関連行事として、バリ島とジャワ島でG20宗教サミット(略称R20)が「グローバルな解決策の源としての宗教を擁護し育む」をテーマに開催され、それぞれの宗教の観点から宗教者の役割について討議された。世界各国から約二百二十人の宗教指導者が一堂に会した。

政府の公式行事としての宗教サミット

インドネシアのバリ島で11月15・16両日に開催されるG20首脳会議(サミット)に先立ち、11月2・3日にはバリ島、4日〜6日はジャワ島の古都ジョグジャカルタで、G20宗教サミット(略称R20)が開催され、約二百二十人の宗教指導者が一堂に会した。これまで、類似の諸宗教会議が



R20全体集会以基調講演する三宅善信理事長

毎年各地で開催されてきたが、今回初めてインドネシア政府がムスリム世界連盟(MWL)とナフダトゥル・ウラマ(NU)同国最大のムスリム団体)と共に主催団体に加わり、同国外務省の

G20公式ウェブサイトで大きく紹介された。

2日の開会式では、急遽参加できなかったジョコ・ウィドド大統領とフライングスコ教皇がビデオメッセージを寄せ、NUのキ・ヤヤ・チョリル・スタクフ議長と、MWLのシェイク・モハンマド・ビン・アブドゥル・カリム・アル・イーサ事務総長が歓迎の挨拶を述べ、参加者を代表して、ヒンズー教の最高指導者スワミ・スリ・ゴヴィンダ・デヴ・ギリ・マハラジ師が挨拶を行った。



三宅善信理事長の基調講演はインドネシア国内で放送された

続いて開催された最初の全体会議では、ナイジェリアのヘンリー・ヌドゥクバ英国教会首席主教、ドイツの世界福音教会連合事務総長トーマス・シルマツハー大主教らと共に、唯一の日本人発表者として招かれた三宅善信神道国際学会理事長らが基調講演を行った。三宅理事長は、「日本は長年、G7中唯一の非白

差のある南北の人々を繋ぐ働きを担っている」という趣旨の講演を行った。



各国のメディアから取材される三宅理事長

この講演の内容がどれくらいイスラム圏諸国や来年度のG20開催国であるインドの関係者の注目を集めたかは、全体会議終了直後に各国のテレビ局から数多くのインタビュー要請があったことからも明白である。三宅理事長は、この後も、MWLのアル・イーサ事務総長と個別会談を行い、2025年の大阪・関西万博

人・非キリスト教国として、東西の人々を繋ぐ働きを担って来たが、世界により大きな影響力を与えつつあるG20の枠組みの中で、インドネシアは、宗教文化や政治体制の異なる東西の人々と経済格

に対するMWLの関わり方について意見交換し、2019年に全世界から1200名のムスリム学者・指導者らがサウジアラビアのマッカに集って策定された世界の諸文明間の多様性を尊重する29カ条に及ぶ画期的な「マッカ憲章」が贈呈された。



ムスリム世界連盟事務総長から「マッカ憲章」を贈呈される

ル教授が発題を行い、これを受けてパネル討議が、続いて「平和的な共存のために、私たちはどのような価値観を身につける必要があるのか、

連日行われた熱心な討議

午後からは、「世界の主要な宗教と文明が共有する価値観の確認と受け入れ」をテーマにハーバード大学法学部のメアリー・A・グレンドン教授の発題を行い、これを受けてパネル討議が行われた。さらに「歴史的遺恨、真相究明、和解と許し」をテーマにイラクのパシチャー・M・ワルダ大司教が発題を行い、パネルディスカッションが行われた。

その理由は「？」をテーマに、米国のテイモシー・S・シャー市民的価値の共有研究所長が発題を行い、パネルディスカッションが行われた。昼食休憩後には、「スピリチュアル・エコロジー」をテーマにヤフヤ・パツラヴィチニ欧州ウラマ評議会議長が発題を行い、それを受けてパネル討議が行われ、バリ島での全デイスカッションが終了した。

最後に、次年度のR20ホスト国インドを代表して、インド財団創設メンバーのスリ・ラム・M・ヴァナラシ師が挨拶を行い、今年度のホストを務めたキ・ヤヤ・チョリル・スタクフNU議長から大会旗を手渡された。

新型コロナウイルスへの対応策の格差

バリ島でのそれぞれの宗教の観点から現代社会に惹起する様々な問題についての宗教者の役割についての二日間の討議に続いて、R20サミット参加者一行は、チャーター機で会場をジャワ島の古都ジョグジャカル

タに移し、今後のR20の課題について検討すると共に、ユネスコ世界遺産にも指定されているヒンズー教遺跡プランバナンや仏教遺跡ポドブールをはじめ、僧院やイスラム系の大学を訪れて、現地の宗教指導者たちとも交流を深めた。現地滞在期間中、参加者は常時軍隊によって警護され、国内の移動は全て警察車両の先導で行われるなど、国を挙げての歓迎となった。

また、この時期、日本ではまだまだ新型コロナウイルス感染症に対する過剰反応から公的な空間ではマスクの着用が義務づけられていたが、インドネシアでは会議参加者もとり、数百人規模の人々が集う晩餐会場においても、誰一人マスクを着用している人が居らず、流行三年目を迎えたCOVID-19に対する内外の意識の差が目立った。なお、日本からは、本会の三宅善信理事長に加えて、服部天神宮の加藤大志禰宜が参加した。



ジョグジャカルタで開催されたR20全体集會

話題のこの人

神道理解の障壁をなくして

カルメン・タマシ

兵庫県立大学国際商経学部 准教授



Q 神道あるいは日本文化に興味を持ったきっかけはいつ、どういう時だったか教えてください。

A 私の現在のキャリアには二つのルートがあります。ひとつは、子供の時に父がギリシャ神話を読んでくれて、その後はお互いに神話のクイズをしたりもって情報を調べたりして、神話に深い興味を持つようになりまして。

もうひとつは、小学校時代に昭和の日本の写真集を拝見し、当時住んでいた周りの世界と比べて不思議の国のような全く別世界で、「私は日本へ行く」と決断しました。ブカレスト大学の外国語学部・日本語学科へ入学して、卒業論文を日本神話について書きました。大学院は日本で勉強して同じく神話、特に『古事記』を研究して、日本神話と神道は密接な関係があって神道についてももっと知りたくて、もっと知識を持たなければならぬと思いました。

Q 来日されてから、どういう大学で学生生活を過ごし、どういう大学で日本人学生に何を教えましたか？

A 日本の初めての経験は二〇〇一年から二〇〇二年の奈良教育大学で交換留学し、その後二〇〇四年から大阪外国語大学で勉強し、二〇〇九年に大阪大学の博士号を取得しました。大学院で指導してくださった先生の研究室に初めて入った時に子供時代に日本を発見した時と同じく、夢の世界に入った気持ちでした。興味深い本、世界の様々な文化の面白いもの、研究の冒険が始まりそんなお部屋でした。い

つか私も同じような雰囲気の研究したいと思って、現在は似たような研究室で日本のお祭りについて研究しております。

日本人学生に日本文化（特に祭り）を教えるのは本学では初めてですが、一般的な知識、つまり日本人だからどんなでも持っている知識と専門の知識の区別を理解する学生の顔は楽しみです。

Q タマシ先生にとって「神道」とは、どういうものですか？

A 「神道は宗教ではない」とよく言われていますが、その構成は信仰と儀礼ですので、宗教であると思います。浅くキリスト教と比較すれば相違していますが、基本的に人間の普遍的な考え方のパターンを反映している日本の古代信仰だと思っています。八百万やおよろずと二神教は根本的に違うと考えられるかもしれませんが、「氏神」と各教会の守護聖人という概念を考察すると類似点の方が多くは思います。神道は日本の古代信仰、日本の伝統の宝庫で、現在社会における生き方のひとつであると思います。

Q 3年間にわたって人類に閉塞感をもたらせたCOVID-19は、タマシ先生の「神道理解」に何らかの変化をもたらせましたか？

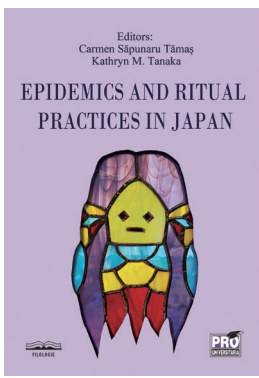
A 「神道理解」の変化というものはなかったと思いますが、研究者としては、本来「疫神を慰める」「疫病を防止する」という目的だった祭りが、「感染予防対策で中止になる」ということには面白いと思っていました。現代社会に

よっては宗教だけではなく、科学の理念もあって科学的な方向へ向かうのは当然だと思いますが、祭りを研究している者としては非常に興味深い現象でした。

Q 今後の神道国際学会の活動に期待するものはありますか？

A 国際学会ですので、世界の宗教との類似点を強調すると思いますが、今後とも各文化の独特な側面を説明しながら普遍的な側面を示す必要があると思います。例えば、「人神」という概念は神道に属しますが、キリスト教にも類似する「聖人」という概念があります。

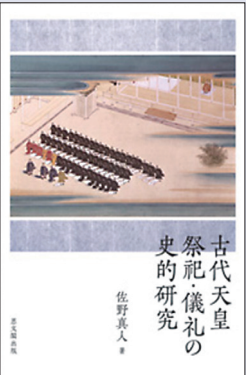
今（令和5年2月末）ちょうど、皇學館大学にて短期で勉強させていたのですが、「神」という概念を説明していただいた時に「日本のユニークなもので、外国の方には理解しにくいかもしれない」と言われました。そのように説明すると、理解を深めることより、障壁を設けることになります。神道国際学会の活動で理解の障壁をなくして、様々な文化、様々な宗教の人々も理解し合うようになることを期待しております。



『Epidemics and Ritual Practices in Japan (日本における伝染病と儀礼的美学)』 Routledge, 2022.

書籍 古代天皇祭祀・儀礼の史的研究

佐野真人 [著] 令和元年10月



古代の朝廷儀礼・祭祀の整備、弘仁12年(821)に完成した『内裏式』によって、整備された儀礼の姿を窺い知ることができる。これ以前の儀礼は、けっして未整備の状態にあつたものではなく、飛鳥時代以来の遣隋使・遣唐使、あるいは渡来系氏族などによって日本に儀礼が伝えられ、儀礼の知識が日本の朝廷には蓄積されていたと推察され、『内裏式』によって集大成されたといえる。

しかし、桓武天皇朝における儀礼の整備については、天皇の即位は辛酉革命、長岡京への遷都は甲子革命にあたとされ、讖緯説に基づいているという考え方が一般的となっている。

しかし、近年では桓武天皇の皇統意識を見直す学説が学界に提示されるようになり、桓武天皇朝の皇統意識に再検討が必要となるならば、皇統意識に基づいて整備されたと考えられてきた平安時代前期における儀礼の整備についても、再検討をする必要がある。

そのような学界の状況の中で本書は、桓武天皇朝以降に見られるという天智天皇系皇統意識(新王朝意識)の見直しというところを出発点に、平安時代初期の桓武天皇朝・嵯峨天皇朝における儀礼の導入や整備、文徳天皇朝以降の儀礼の変遷や新たな儀礼の創出について考察を加えることで、平安時代前期を中心とした古代日本の儀礼秩序の構築過程の一端を明らかにしようとする。

桓武天皇の儀礼整備は天智天皇系新王朝意識によるものではないことは、第1部を通じて検討し、桓武天皇の意思を受け継いだ嵯峨天皇によって『内裏式』が編纂され、朝廷の儀礼は一応の完成を見たと考えられる。しかし、清和天皇朝以降に幼帝が出現するようになると、『内裏式』で定められ

た儀礼を行うことが難しくなり、時代の状況に合わせて小朝拝などの新たな儀礼の創出やこれまでの儀礼が変質していったことを第2部において論究する。そして、本書は平安時代前期における儀礼の整備は、桓武天皇・嵯峨天皇朝を儀礼の整備と完成期、文徳天皇・清和天皇朝を儀礼の変革期という二期に分類し、その概要を提示している。

本書の構成は、以下の通り。

第1部 桓武天皇朝の皇統意識再考と儀礼の導入

- 第1章 桓武天皇と儀礼・祭祀
- 第2章 日本における昊天祭祀の受容
- 第3章 奈良時代に見られる郊祀の知識 — 天平三年の対策と聖武天皇即位に関連して —
- 第4章 山陵祭祀より見た皇統意識の再検討
- 第5章 古代日本の宗廟観 — 「宗廟=山陵」概念の再検討 —
- 第6章 「不改常典」に関する覚書

第2部 古代正月儀礼の整備と変質

- 第7章 天地四方拝の受容 — 『礼記』思想の享受に関連して —
- 第8章 唐帝拝礼作法管見 — 『大唐開元礼』に見える「皇帝再拜又再拜」表記について —
- 第9章 「儀仗旗」に関する一考察
- 第10章 正月朝覲行幸成立の背景 — 東宮学士滋野貞直の学問的影響 —
- 第11章 朝賀儀と天皇元服・立太子 — 清和天皇朝以降の朝賀儀を中心に —
- 第12章 延長七年元日朝賀儀の習礼 — 『醍醐天皇御記』・『史部王記』に見る朝賀儀の断片 —
- 第13章 小朝拝の成立
- 第14章 皇后拝賀儀礼と二宮大饗

AIと宗教

金光教春日丘教会長／(株)レルネット代表 三宅善信

長い歴史の中で宗教は、政治・軍事・経済・文化等から絶えず挑戦を受けてきた。それら宗教に対抗するセクターの中で現在、最も強力な分野は、言うまでもなく科学技術である。過去、半世紀における生命科学の進歩は、われわれの生命観に大きな変化をもたらせた。そして、それ以上に、昨今驚異的な速度で進歩してきている科学技術は「人工知能(AI)」であり、この新しい技術は、人間のあり方を根本的に変えてしまうかもしれない。

旧約聖書の『創世記』第1章16-17節で、創造主(ヤハウェ)は「…あなた(アダム)はエデンの園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない…」と命じられたのに、アダムがこの禁忌を犯したことによって人類は原罪を得たのである。インターネットを通じて自ら無限に知識を得ることができる「深層学習(ディープラーニング)」という方法を手にしたAIは、今や全知全能となったのである。

一般に、宗教における教義や儀礼は、その創始者の時代から今日まで「不変のものである」と信じられているが、それは間違えている。一番有名な例は、約500年前のマルティン・ルターによる「宗教改革」である。ルターは、それまで1000

年間の長きにわたってローマカトリック教会が独占していた西欧におけるキリスト教の神学的解釈権に対して、「聖書のみ(sola scriptura)」すなわち、「キリスト教の教義はローマ教皇ではなく、聖書のみに基づくべきだ」と主張したのであるが、この主張が成り立つためには、その直前にヨハネス・グーテンベルクによって活版印刷という新技術が発明され、「文字が読めさえすれば誰でも聖書が読めるようになった」ことが大前提としてある。つまり、技術革新が宗教を変えたのである。

21世紀になってからのモバイル端末を用いたSNSの急激な普及が、中東に「アラブの春」と呼ばれる社会変革をもたらせたことは記憶に新しい。そして、今、世界に衝撃を与えているChatGPTをはじめとする「生成系AI」の登場である。インターネットを通じて世界中の膨大なデータに自由にアクセスして、意味のある文章や画像や音楽などを自動的に創り出せる技術の解放は、エデンにおける創造主とアダムの間におきた出来事の再現であって、好むと好まざるとに関わらず、今後の宗教の教義や儀礼は、生成系AIが投げかけてくる問題に対応せざるを得なくなったのである。しかも、AIの記憶力や情報処理の速度が人間のそれを遙かに上回っている

ことは、例えば囲碁や将棋の名人でもAIには全く歯が立たないことから明白である。

人間とAIを分かつ唯一の違いは、その「身体性」の有無である。例えば、人間の赤ちゃんがAIに言葉を覚えさせた場合、AIはアルファベットのどの音も同時に覚えられるのに対して、赤ちゃんの場合は、どの民族でも、母音では「a」「o」「u」、子音では「m」「b」「p」の音声を真っ先に習得する。これは、赤ちゃんが母乳を吸うときの唇の形状から必然的に誘導される音声であり、だから、赤ちゃんが最初に発する「言葉」は「ママ」なのである。

人間の思考は、どれだけ抽象的あるいは形而上学的に精緻なものを目指したとしても、人間存在そのものが有する「身体性」という限界によって「無限」には至ることができないのである。つまり、AIが創り出す世界はあくまでも「仮想現実」であって、人間が実際にその中で暮らし、痛みや喜びを感じる「現実世界」とは別のものである。もし、AIが「生身の人間」と同じような感覚をもって人間を理解したいのであれば、AIも弱々しく傷つきやすい身体を持たねばならないであろう。そのような自己増殖可能な「生の身体」を持ったAIが登場した時こそ、既存の宗教は本当の危機に直面するであろう。

書評

神社の成立と展開

白山芳太郎 [著]

富山房企畫、2021年11月6日刊、194ページ、ISBN 978-4-86600-099-2、本体2,200円+税

評／月ヶ瀬 悠次郎(ひめじ芸術文化創造会議 代表)

本書は、神道の歴史について『神社の成立』と『神社の展開』の2つに分けて通史的に記されたものです。比較的ゆったりとした組版で、写真や図が多め。全体的に読みやすい印象。

前半は、アニミズム的な信仰として誕生した神道が、律令国家の形成とともに祭礼・政(まつりごと)として制度化される過程で(臨時的に設けられる祭壇ではなく)常設された社殿を持つに至った経緯が語られています。

特に、古代の信仰については、海外の諸地域的神話や伝承、気候や風土、狩猟採取・農耕の科学的考察など手がかりにしながら丁寧に説明がなされています。例えば、狩猟採取時代に土器を用いることは世界的には稀であるそうです。古代日本人だけが「土器を用いた加熱調理を伴う狩猟採取生活」をしていたとすると、日本人の鍋好きにも合点がいきます。

そのような稀有な文化を古くから有し、ギリシャ神話を始めとする世界の神話に比肩するような日本神話が記紀のような古代の書物によって現代に伝えられているにもかかわらず、宗教色を嫌う教育現場の影響からか、それらが古代文学としてすら愛されていないことは、著者の指摘の通りです。個人であっても「自分がどう生まれ、どう育ち、いまどうしているのか」について説明できないような人物が他者からどのように映るかということを考えれば、日本人が出自に無頓着であることの異常性は理解できるはずですが。本書は、神道研究者の立場から「神道の出自」を説明しようすると同時に、日本人の出自についても同時に明らかにしようとする試みであるように思います。

また後半は、律令国家の形成、仏教との共存(習合)、武家の台頭、戦国時代の混

乱、幕藩体制、明治維新……と日本社会の大きな変容の中でどのように神社・神道が形を変えて継承されてきたかについて、やや駆け足で語られています。御霊信仰、両部神道、山王神道、修験道、伊勢神道、吉田神道、儒家神道、吉川神道、垂加神道、復古神道……と複雑化する分離・習合について飛鳥から明治まで時代背景を示しながら、その誕生の経緯と系譜がわかりやすく示されています。

特に明治期における「神仏判然」令について著者は「神仏分離」ではないと強く断じ、紙数を使って丁寧に説明しています。

神仏判然令は復古神道の立場から神仏習合の解消とそれぞれが判然されることを目指したものであり、決して仏教の排除・弾圧を企図したのではなく、廃仏毀釈と同義に語られることは間違いである。寺内の神社は残り、神社内の寺が消えたことも、むしろ神社の側が財産を分け与えるばかりであったことを示している、と述べています。また廃仏毀釈は、(明治政府による仏教弾圧ではなく)むしろ江戸時代に幕府の下請けとして檀家帳(事実上の戸籍)、すなわち徴税システムの一部を管理することで恩恵を受けていた寺に対して行われた「庶民による報復」であったとしています。

なかなか強烈で攻撃的な指摘ではありますが、あとがきにおいても繰り返し取り上げられており、本書の最重要な議論であることは疑いありませんので、ご紹介しておきます。



神道国際学会非法人化について

神道国際学会会員諸氏におかれてはすでにご承知のことと存じますが、本会は令和3年8月に臨時社員（会員）総会を開催し、圧倒的多数の賛意を得て、従来の特定非営利活動法人（以下、NPO法人と略す）の法人格を放棄して、任意団体という形式で活動を継続してゆくことになりました。そのこの経緯とその後の展開について、本誌誌面を借りて、今一度、ご説明申し上げます。

そこで、「特定非営利活動法人神道国際学会」の「定款」の定めにより、令和3年8月25日に東京都中央区の真和総合法律事務所内会議室において臨時社員総会を開催し、「特定非営利活動法人神道国際学会」の解散を議決し、ただちに東京都へ文書で通知すると共に、所定の手続を経て官報にも掲載し、2カ月をかけて法人としての清算業務を無事終了いたしました。

しかしながら、より大事なことは、NPO法人時代に近いレベルの活動を展開してゆくことであり、NPO法人解散と同時に、任意団体としての「神道国際学会」を設立し、解散法人の清算人に就任した弁護士塩谷崇之常任理事以外のすべての理事は、任意団体の理事として横滑りで就任していただきました。なお、塩谷氏に関しては、清算業務期間中は、利益相反になるため理事職を辞していただいておりますが、清算業務終了後、あらためて常任理事に復帰していただきました。また、事務局の所在地は、東京都認証のNPO法人時代は東京都世田谷区にありましたが、任意団体化して後は、当面の間、理事長の居住する大阪府茨木市に移転いたしました。もちろん、会員の皆様の会員資格は、すべて従前通りで保証されています。

本会が平成12年に東京都を所轄庁とする特定非営利活動法人としての認可を受けてより20年の歳月が経過いたしました。そのNPO法人としてこれまで成長してまいりましたが、コロナ禍によって社会情勢が一変した（長年にわたって、寄附金受取りの条件として「法人格を有する団体」を指定していた最大手の寄附者が、令和2年をもって大口の寄附を打ち切った）今日においては、より自由でより実質的な活動を求める時期に入っているのではないかと感じることになり、令和3年8月2日に開催された令和3年度第2回理事会において、NPO法人格を返上（例えば、NPO法人格を保持しているだけで、毎年30万円もの監査法人への支出が必要）し、他の多くの学会の例に倣った形（任意団体という形式）で「神道国際学会」としてより目的の中心に傾注した活動を求めるべく、時期であるとの意思決定をするに至りました。

とは申せ、令和3年度後半は法人の清算業務（例えば、事務局で使用していたレンタル機器の

中途解約をはじめとする様々な契約解除手続）や任意団体の口座開設等の業務等に忙殺され、また、令和4年度はまだコロナ禍による各種の制約があり、恒例の国際神道セミナーの開催は適いませんでしたが、本誌第4面に紹介されているごとく、疫神の総本社である播磨国廣峯神社でのフィールドワークの実施や、令和3年と4年秋に京都で開催された第22・23回齋宮セミナー『神話と伝承』（本誌第1面に掲載）を共催して、奥野卓司副会長らがパネリストを務めるなど、いくつかのイベントを実施することができました。さらに、令和4年11月にインドネシアで開催されたG20宗教サミットでは、三宅善信理事長が日本人としては唯一基調講演者に名を連ねるなど、内外に活動を展開してまいりました。

また、今回の『神道フォーラム』第63号の刊行に続き、これまで開催されてきた国際神道セミナー『神々と伝染病』や『アニメのカミ』などの講演録の刊行準備を行っております。さらに、各種の興味深いテーマについて、国際神道セミナーの開催を予定いたしておりますので、会員各位におかれましては、意義ある本会の活動をますます充実させていくために、従前通りの会費をお支払いくださいまして、倍旧のご支援を賜りますことを希います。会費の額や口座情報につきましては、以下の欄をご参考ください。

1面の続き



講演をおこなうマクミラン教授

『One Hundred Poets, One Poem Each』とその日本語訳『英詩訳・百人一首——香り立つやまとこころ』で注目され、伊勢物語の英訳『The Tales of Ise』をはじめ万葉集など多くの古典文学の観賞と翻訳に取り組んでいる。そのため、マクミラン教授は二十年暮らした東京から昨年、百人一首発祥の地である嵯峨野の小倉山に居を移したほどである。

マクミラン教授は、万葉歌人柿本人麿が詠んだ「あしびきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む」や、同じく万葉歌人猿丸太夫の歌「奥山に紅葉踏みわけ鳴く鹿の声きく時ぞ秋は悲しき」や、平安中期の歌人曾禰好忠が詠んだ「由良の門を渡る舟人 かぢをたえゆく

へも知らぬ 恋の道かな」など誰でも知っている和歌の英訳文をいくつか比較検討して、セミナー参加者にも「どちらの訳文のほうがより適切に作者の意図を反映しているか？」と問うなど、翻訳というプロセスを通じて日本語で読んでいただけの時には見逃していたような点についての気づきを与えた。

パネル討議

三人の研究者による講演に続いて、神道国際学会副会長の奥野卓司山階鳥類研究所所長（当時）とユダヤ思想研究家の手島勲矢博士が加わり、三つの講演を受けてそれぞれの視点から問題を指摘した。パネル討議の進行は、本齋宮セミナーの主催者である懸野直樹野宮神社宮司が行った。この日のセミナーの様子は、オンラインで視聴することができた。



懸野直樹宮司の進行でパネル討議に花が咲いた

編集後記

『神道フォーラム』第62号が刊行されてから、本号刊行されるまで二年半の歳月が開いてしまったこととお詫び申し上げます。三年間に及ぶコロナ禍による行動制限と、上記の記事で述べたような理由によって、本誌の刊行が滞っておりますが、『神道フォーラム』は、本会と学会員の皆様を繋ぐ大切なメディアです。

本号掲載の各記事をご一読いただいてもお判りのように、非法人化されても従前通りの活動を行ってまいりますので、倍旧のご支援を賜りたく存じます。そのためにも、同封の郵便振替用紙で会費のお振り込みをいただきますたく存じます。

神道国際学会からのお知らせ

◆ご入会のご案内：神道国際学会にはどなたでも入会できます。資料をご請求ください。

年会費	
一般会員	5,000円
賛助会員	30,000円
特別賛助会員	50,000円
法人会員	100,000円

お振込先	
ゆうちょ銀行	店番408
普通預金	
口座番号	7001289
口座名	神道国際学会

神道国際学会

〒567-0864 大阪府茨木市沢良宜浜1-16-31-1002
info@shintou.org